大都市ひとりぐらし高齢者のソーシャルサポートネットワークの状況
－墨田区ひとりぐらし高齢者実態調査結果からⅡ－

プロジェクト1　研究員
東洋大学社会学部　助教
後藤　広史

Ⅰ．研究の目的

近年、社会福祉の領域において「社会的孤立」の問題に対する関心が高まっている（岩田・黒岩2004；後藤2009；河合2009；斉藤2009）。とりわけ今回調査の対象となった高齢者領域における「社会的孤立」の問題は、しばしば「孤独死」というセンセーショナルな結果をもたらすため、「社会的孤立」状況の中にある人々の中でも特に問題視される傾向にある。

「社会的孤立」という状況をどう定義するかについては、様々な見解があるにせよ（斉藤2009）[1)]、それらは「社会的なネットワークからの切断」を意味するという点ではほぼ共通している。このことは同時に、社会的な支援を提供するようなネットワーク（ソーシャルサポートネットワーク）からの切断も意味するため、「社会的孤立」状況に至ると自助努力で解決できない生活問題が生じても社会的な支援（ソーシャルサポート）が得られなくなる。したがって、特に支援ということが強調される社会福祉の領域においては、ソーシャルサポートネットワークをいかに構築するかということを念頭に置きながら、「社会的孤立」の問題について検討していく必要があると思われる。

本稿はこうした問題意識のもと、2008年に行われた「墨田区ひとりぐらし高齢者実態調査」を特にソーシャルサポートという点から再分析する。具体的には、異なるソーシャルサポートの種類を設定したうえで、それぞれについてどのような属性の人がそれを受けられると期待できる／できないと考えているのか、また期待できると考えている人でも属性によってその期待できる人にどのような違いが見られるのか明らかにしていきたい。そのうえで最も支援が必要と思われるグループ、すなわち設定したソーシャルサポートのすべてを期待できないと考えているグループについてさらに掘り下げて検討し、今後求められる取り組みの視点について考察する。

Ⅱ．主に用いる変数

ソーシャルサポートの種類は研究者によって様々に分類されているが、大きく分けて、直接的サポートと情緒的サポートに分類できるといわれている（House2001；浦1992）。前者について本稿では、直接的サポートを趣の異なる2つの観点（直接手伝いをするようなサポートと金銭的なサポート）に分け、これら3つのサポートに該当すると思われる以下の3つの変数を用いることにした。

①「悩みや心配事を相談できる人」→情緒的サポート
②「急病時にかけつけてくれる身近な人」→手段的サポート（手段的サポートA）
③「数万円の金銭的支援を頼めそうな人」→手段的サポートのうち金銭的なサポート（手段的サポートB）

Ⅲ．分析結果

1．単純集計

まず、これらの変数[2)]の単純集計についてみてみよう。

表1は情緒的サポートに相当すると考えられる「悩みや心配事を相談できる人」について尋ねたものである。「家族親族」（59.4％）の割合が最も高い。次に割合が高いのが「友人知人」で31.2％、「いない」が18.6％であった。「近隣の人」は11.5％と「その他」を除くと最も低かった。

表１　悩みや心配事を相談できる人（複数回答）

	N	%	ケースの%
家族親族	1501	38.6	59.4
友人知人	789	20.3	31.2
近隣の人	290	7.5	11.5
公的サービス機関の人	418	10.8	16.5
医療機関の人	344	8.9	13.6
その他	73	1.9	2.9
いない	470	12.1	18.6
合計	3885	100.0	153.8

表2は手段的サポートに相当すると考えられる「急病時にかけつけてくれる身近な人」について尋ねたものである。便宜的にこれを「手段的サポートＡ」とする。先と同様「家族親族」の割合が最も高く約7割になっている。次に割合が高いのが「友人・知人」（30.1％）であり、この順番も同様である。特徴的なのは「近隣の人」が25.6％と先の結果と比べると割合が高い点である。悩みや心配事は相談できなくても、急病時の際には「近隣の人」が頼りになると考えている人が多いといえそうである。

表２ 急病時にかけつけてくれる身近な人（複数回答）

	N	%	ケースの%
家族親族	3976	44.0	69.5
友人知人	1722	19.1	30.1
近隣の人	1466	16.2	25.6
公的サービス機関の人	487	5.4	8.5
医療機関の人	568	6.3	9.9
その他	130	1.4	2.3
いない・わからない	688	7.6	12.0
合計	9037	100.0	158.1

表3は手段的サポートの中でも先の手段的サポートＡとはやや趣が異なる「数万円の金銭的支援を頼めそうな人」について尋ねたものである。便宜的にこちらは手段的サポートＢとする。こちらも同様に、「家族親族」が63.0％と最も割合が高い。次に割合が高いのが「友人・知人」で14.9％と、この順番も同様である。一方「近隣の人」は2.9％であり、先の「急病時にかけつけてくれる身近の人」の割合と比較するとかなり低いことがわかる。これらのことからソーシャルサポートの種類によってそれを期待できる人に違いがあることがわかる。また、「いない・わからない」も30.8％と、上記2つと比較すると割合が高い。

表３ 数万円の金銭的支援を頼めそうな人（複数回答）

	N	%	ケースの%
家族親族	3471	55.9	63.0
友人知人	821	13.2	14.9
近隣の人	162	2.6	2.9
その他	57	0.9	1.0
いない・わからない	1699	27.4	30.8
合計	6210	100.0	112.7

２．属性とソーシャルサポートの関係

次に回答者の属性とそれぞれのソーシャルサポートの関係についてみてみよう。

１）性別

表4は性別と悩みや心配事を相談できる人（情緒的サポート）の関係をみたものである。女性は、「家族

親族」(69.8%)、「友人知人」(34.5%)、「近隣の人」(13.7%)などインフォーマルな関係の人々の割合が高い。一方男性はそうした人々の割合が相対的に低く、「公的サービス機関の人」(20.0%)、「医療機関の人」(15.3%)とフォーマルな関係の人々の割合が高くなっている。また「いない」では男性が31.0%と女性の倍以上割合が高い。

次に性別と急病時にかけつけてくれる身近な人（手段的サポートA）の関係である（表5)。単純集計でも述べたように、他の二つのソーシャルサポートと比べて「近隣の人」の割合が性別に関わらず高いほかは、全体的な傾向は表4と同じである。

最後に、性別と数万円の金銭的支援を頼めそうな人（手段的サポートB）の関係である（表6)。先の二つのソーシャルサポートでは、「友人知人」の割合が女性の方が高かったが、ここでは女性が13.7%であるのに対して、男性が18.4%となっており、その割合が逆転している。

表6 性別×数万円の金銭的支援を頼めそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	いない わからない	合計
男性	588 (4.4%)	244 (18.4%)	40 (3.0%)	623 (47.1%)	1324
女性	2441 (71.8%)	467 (13.7%)	94 (2.8%)	830 (24.4%)	3399
合計	3029	711	134	1453	4723

2）年齢

表7は、年齢と悩みや心配事を相談できる人（情緒的サポート）の関係をみたものである。どの年代でも

表４　性別×悩みや心配事を相談できる人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない	合計
男性	267(39.6%)	181(26.9%)	48(7.1%)	135(20.0%)	103(15.3%)	209(31.0%)	674
女性	1034(69.8%)	511(34.5%)	203(13.7%)	217(14.6%)	187(12.6%)	204(13.8%)	1482
合計	1301	692	251	352	290	413	2156

表5　性別×急病時にかけつけてくれそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない わからない	合計
男性	699(51.7%)	373(27.6%)	244(18.0%)	158(11.7%)	135(10.0%)	323(23.9%)	1352
女性	2764(78.2%)	1122(31.8%)	1033(29.2%)	258(7.3%)	348(9.8%)	279(7.9%)	3533
合計	3463	1495	1277	416	483	602	4885

表7　年齢×悩みや心配事を相談できる人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない	合計
65～69歳	276（46.3%）	222（37.2%）	46（7.7%）	66（11.1%）	58（9.7%）	170（28.5%）	596
70～74歳	311（52.0%）	202（33.8%）	52（8.7%）	74（12.4%）	79（13.2）	149（24.9%）	598
75～79歳	317（62.8%）	162（32.1%）	69（13.7%）	91（18.0%）	77（15.2%）	81（16.0%）	505
80～84歳	306（71.7%）	111（26.0%）	67（15.7%）	79（18.5%）	63（14.8%）	47（11.0%）	427
85歳以上	258（82.2%）	73（23.2%）	50（15.9%）	98（31.2%）	54（17.2%）	17（5.4%）	314
合計	1468	770	284	408	331	464	2440

「家族親族」の割合が最も高く、年齢が高くなるほどその割合が増えていく傾向にある。この傾向は「近隣の人」、「公的サービス機関の人」「医療機関の人」についても同様である。逆に「友人知人」、「いない」は年齢が高くなるにつれて割合が少なくなっている。

次に、年齢と急病時にかけつけてくれる身近な人（手段的サポートA）の関係である（表8）。先ほどと同様「家族親族」の割合が最も高い。また、年齢が高くなるほど「家族親族」、「近隣の人」、「公的サービスの人」「医療機関の人」の割合が上昇していくのは先ほどと同様であるが、相対的に「近隣の人」の割合が高い点が特徴的である。

最後は、年齢と数万円の金銭を頼めそうな人の関係である（表10）。先ほどと同様にどの年代でも「家族親族」の割合が高く、年齢が高くなるほどその割合も高くなる。一方「いない・わからない」は年齢が高いほど割合が低くなる傾向にある。「近隣の人」についてはどの年代でも割合がかなり低い。

3）ひとりぐらしのきっかけ

表10はひとりぐらしのきっかけと悩みや心配事を相談できる人（情緒的サポート）の関係である。ここで

表8　年齢×急病時にかけつけてくれそうな身近な人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない わからない	合計
65～69歳	824(62.7%)	482(36.7%)	256(19.5%)	54(4.1%)	75(5.7%)	269(20.5%)	1315
70～74歳	928(65.6%)	477(33.7%)	345(24.4%)	95(6.7%)	132(9.3%)	212(15.0%)	1414
75～79歳	888(73.4%)	361(29.9%)	334(27.6%)	97(8.0%)	121(10.0%)	116(9.6%)	1209
80～84歳	753(78.1%)	243(25.2%)	291(30.2%)	105(10.9%)	118(12.2%)	54(5.6%)	964
85歳以上	496(79.7%)	119(19.1%)	209(33.6%)	119(19.1%)	100(16.1%)	24(3.9%)	622
合計	3889	1682	1435	470	546	675	5524

表9 年齢×数万円の金銭的支援を頼めそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	いない わからない	合計
65～69歳	711(55.0%)	286(22.1%)	34(2.6%)	495(38.3%)	1292
70～74歳	804(57.9%)	233(16.8%)	38(2.7%)	489(35.2%)	1388
75～79歳	771(66.7%)	153(13.2%)	41(3.5%)	345(29.8%)	1156
80～84歳	661(72.5%)	92(10.1%)	27(3.0%)	214(23.5%)	912
85歳以上	455(76.5%)	39(6.6%)	16(2.7%)	112(18.8%)	595
合計	3402	803	156	1655	5343

表10　ひとりぐらしのきっかけ×悩みや心配事を相談できる人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない	合計
配偶者死亡	815(73.7%)	344(31.1%)	172(15.6%)	190(17.2%)	177(16.0%)	133(12.0%)	1106
配偶者以外の同居者死亡	135(61.9%)	68(31.2%)	27(12.4%)	37(17.0%)	23(10.6%)	43(19.7%)	218
同居者との別居	242(58.5%)	132(31.9%)	36(8.7%)	69(16.7%)	48(11.6%)	87(21.0%)	414
未婚離別	165(38.3%)	154(35.7%)	25(5.8%)	59(13.7%)	50(11.6%)	125(29.0%)	431
その他	110(44.0%)	74(29.6%)	20(8.0%)	47(18.8%)	31(12.4%)	63(25.2%)	250
合計	1467	772	280	402	329	451	2419

は違いが顕著な「配偶者死亡」と「未婚離別」についてみてみよう。前者は「家族親族（73.7％）、「近隣の人」（15.6％）とインフォーマルな関係の人々と「医療機関の人」（16.0％）の割合が高く、「いない」（12.0％）の割合が低い。逆に「未婚・離別」では、「家族親族」（38.5％）、「近隣の人」（5.8％）とインフォーマルな人々の割合が低く、「いない」（29.0％）の割合が高い点が目を引く。

次に、ひとりぐらしのきっかけと急病時にかけつけてくれる身近な人（手段的サポートA）の関係である（表11）。ここでも「配偶者死亡」と「未婚離別」についてみてみよう。前者は同様に「家族親族」（80.0％）と「近隣の人」（31.9％）とインフォーマルな人々の割合が高い。特に「近隣の人」は、先の「悩みや心配事を相談できる人」と比べると倍近い割合である。「未婚・離別」については先と同様の傾向である。

最後に、ひとりくらしのきっかけと数万円の金銭を頼めそうな人との関係である（表12）。配偶者死亡では、やはり「家族親族」（74.3％）の割合が高く、「いない・わからない」（22.3％）の割合が低い。逆に「未婚・離別」では、「家族親族」（41.8％）の割合が低く、「いないわからない」（49.2％）の割合が高いことがみてとれる。

4）家計の状況

最後に、家計の状況とそれぞれのソーシャルサポートの関係についてみてみよう。

表13は家計の状況と悩みや心配事を相談できる人（情緒的サポート）の関係をみたものである。もともと家計の状況を「余裕あり」と回答した数が多くないので単純な比較はできないが、「余裕あり」のグループと「余裕はないが困ることはない」としたグループにあまり差違は見られない。一方「余裕なし」では、

表11　ひとりぐらしのきっかけ×急病時にかけつけてくれそうな身近な人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない わからない	合計
配偶者死亡	2117（80.0%）	779（29.5%）	845（31.9%）	232（8.8%）	299（11.3%）	168（6.4%）	2645
配偶者以外の同居者死亡	346（73.3%）	152（32.2%）	132（28.0%）	41（8.7%）	48（10.2%）	45（9.5%）	472
同居者との別居	617（70.0%）	279（31.6%）	205（23.2%）	74（8.4%）	76（8.6%）	112（12.7%）	882
未婚・離別	435（47.9%）	296（32.6%）	138（15.2%）	71（7.8%）	68（7.5%）	228（25.1%）	908
その他	348（62.0%）	172（30.7%）	100（17.8%）	57（10.2%））	54（9.6%）	101（18.0%）	561
合計	3863	1678	1420	475	545	654	5468

表12　ひとりぐらしのきっかけ×数万円の金銭的支援を頼めそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	いない わからない	合計
配偶者死亡	1878（74.3%）	314（12.4%）	101（4.0%）	563（22.3%）	2527
配偶者以外の同居者死亡	296（65.5%）	72（15.9%）	9（2.0%）	136（30.1%）	452
同居者との別居	531（61.0%）	150（17.2%）	18（2.1%）	280（32.2%）	870
未婚・離別	375（41.8%）	172（19.2%）	14（1.6%）	441（49.2%）	897
その他	301（54.3%）	92（16.6%）	15（2.7%）	217（39.2%）	554
合計	3381	800	157	1637	5300

相対的に「家族友人」(50.9%) の割合が低く、「公的サービス機関の人」(20.5%)、「いない」(23.6%) で割合が高くなっている。

次に家計の状況と急病時にかけつけてくれる身近な人（手段的サポートA）の関係である（表14)。こちらも割合的には、「家族親族」でやや違いがみられるものの、「余裕あり」のグループと「余裕なし」のグループであまり差違は見られない。一方「余裕なし」では、「家族親族」(57.5%)、「近隣の人」の割合が低く、「いない・わからない」(20.1%) の割合がかなり高くなっている。

最後に家計の状況と数万円の金銭的支援を頼めそうな人（手段的サポートB）の関係である（表15)。先の2つのソーシャルサポートでは、「余裕あり」と「余裕はないが困ることはない」のグループにそれほど差違は見られなかったが、ここでは「いない・わからない」の割合にやや開きがみられる。また「余裕なし」のグループでは、「家族親族」(45.2%) の割合が5割を切り、反対に「いない・わからない」(48.7%) が5割に迫る結果となっている。

表13 家計の状況×悩みや心配事を相談できる人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない	合計
余裕あり	103(69.6%)	47(31.8%)	12(8.1%)	20(13.5%)	20(13.5%)	22(14.9%)	148
余裕はないが困ることはない	858(66.9%)	396(30.9%)	166(12.9%)	184(14.3%)	174(13.6%)	197(15.4%)	1283
余裕なし	518(50.9%)	337(33.1%)	110(10.8%)	208(20.5%)	141(13.9%)	240(23.6%)	1017
合計	1479	780	288	412	335	459	2448

表14 家計の状況×急病時にかけつけてくれそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	公的サービス機関の人	医療機関の人	いない わからない	合計
余裕あり	394(83.5%)	156(33.1%)	133(28.2%)	47(10.0%)	55(11.7%)	24(5.1%)	472
余裕はないが困ることはない	2516(75.4%)	1035(31.0%)	942(28.2%)	251(7.5%)	315(9.4%)	300(9.0%)	3338
余裕なし	992(57.7%)	500(29.1%)	363(21.1%)	177(10.3%)	170(9.9%)	346(20.1%)	1720
合計	3902	1691	1438	475	540	670	5530

表15 家計の状況×数万円の金銭的支援を頼めそうな人（複数回答）

	家族親族	友人知人	近隣の人	いない わからない	合計
余裕あり	353(80.4%)	88(20.0%)	20(4.6%)	63(14.4%)	439
余裕はないが困ることはない	2284(71.5%)	515(16.1%)	107(3.4%)	750(23.5%)	3193
余裕なし	775(45.2%)	209(12.2%)	31(1.8%)	835(48.7%)	1713
合計	3412	812	158	1648	5345

3．「ソーシャルサポートなし」グループ

さて、これまで回答者の属性とそれぞれのソーシャルサポートの関係についてみてきたが、次は最も支援の必要性が高いと思われるグループ、すなわちこれら3つのソーシャルサポートすべてに関して期待できる人が「いない・わからない」と回答している人々（n=212 回答者全体の3.5%）について詳しくみてみよう。

1）性別

性別では「男性」が51.9%、「女性」が37.7%であり、男性のほうがやや割合が高いがあまり大きな差違は見られない。

表16 「ソーシャルサポートなし」グループの性別

	N	%
男性	110	51.9
女性	80	37.7
合計	190	89.6
未回答	22	10.4
	212	100.0

2）年齢

年齢では、「65 ～ 69歳」が41.0%、「70 ～ 74歳」が30.2%、「75 ～ 79歳」が17%、「80 ～ 84歳」が7.5%、「85歳以上」が2.4%と年齢が若いほど割合が高くなっている。

表17「ソーシャルサポートなし」のグループの年齢

	N	%
65 ～ 69歳	87	41.0
70 ～ 74歳	64	30.2
75 ～ 79歳	36	17.0
80 ～ 84歳	16	7.5
85歳以上	5	2.4
合計	208	98.1
未回答	4	1.9
	212	100.0

3）ひとりぐらしのきっかけ

ひとりぐらしのきっかけでは、「配偶者死亡」が26.9%、「配偶者以外の同居者死亡」が7.5%、「同居者との別居」が15.6%、「未婚・離別」が30.7%であり、「未婚・離別」の割合が最も高い。

表18「ソーシャルサポートなし」グループのひとりぐらしのきっかけ

	N	%
配偶者死亡	57	26.9
配偶者以外の同居者死亡	16	7.5
同居者との別居	33	15.6
未婚・離別	65	30.7
その他	29	13.7
合計	200	94.3
未回答	12	5.7
	212	100.0

4）家計の状況

最後に家計の状況であるが「余裕あり」はわずかに2.4%、「余裕があるが困ることはない」が38.2%、「余裕なし」が58.8%と「余裕なし」が5割を超える結果となっている。

表19「ソーシャルサポートなし」グループの家計の状況

	N	%
余裕あり	5	2.4
余裕はないが困ることはない	81	38.2
余裕なし	123	58.0
合計	209	98.6
未回答	3	1.4
	212	100.0

4．属性と「サポートなし」グループの関係

以下の表はこれらの関係についてさらに詳しく見るために3重クロス集計を行った結果である。

性別と年齢の関係（表20）では、男性では「65 ～

69歳」が51.8％と実に半数以上がここに集中している。それ以降になると男女の割合が逆転し、以降は女性の割合が高くなる。

性別とひとりぐらしのきっかけの関係（表21）では、「配偶者死亡」で女性の割合がやや高いほかは、性別による差異はあまり見られない。

性別と家計の状況の関係（表22）では、「余裕なし」のカテゴリーで差がみられた。

これらのことを総合すると今回のひとりくらし高齢者調査で「ソーシャルサポートなし」グループになりやすい傾向にあったのは、「男性」で「（高齢者の中でも）年齢が低く」、「金銭的に余裕がない」人々といえそうである。

5.「ソーシャルサポートなし」グループの福祉サービス利用状況と利用意向

それでは、「ソーシャルサポートなし」グループは、現在居住している墨田区のどのような福祉サービスを利用しており、また、今後どのような福祉サービスの利用意向があるのだろうか。最後にこのことについて確認し、今後このグループに対して求められる取り組みの視点について検討したい。

まず、福祉サービスの利用状況である。当然と言えば当然だが、表23・24に見るように「ソーシャルサービスなし」グループの8割以上が介護保険制度も、墨田区のどの福祉サービスも利用していないことがわかる。

表22「ソーシャルサポートなし」グループの介護保険利用状況[3)]

	N	%
受けていない	172	81.1
要支援1	10	4.7
要支援2	1	.5
要介護1	3	1.4
要介護2	1	.5
わからない	13	6.1
合計	200	94.3
未回答	12	5.7
	212	100.0

表20　「ソーシャルサポートなし」グループの性別と年齢の関係

	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80～84歳	85歳以上	合計
SSなし（男性）	57（51.8%）	29（26.4%）	18（16.4%）	5（4.5%）	1（.9%）	110（100.0%）
SSなし（女性）	23（29.1%）	26（32.9%）	18（22.8%）	9（11.4%）	3（3.8%）	79（100.0%）
合計	80（42.3%）	55（29.1%）	36（19.0%）	14（7.4%）	4（2.1%）	189（100.0%）

表21　「ソーシャルサポートなし」グループの性別とひとりぐらしのきっかけの関係

	配偶者死亡	配偶者以外の同居者死亡	同居者との別居	未婚・離別	その他	合計
SSなし（男性）	24（24.0%）	6（6.0%）	16（16.0%）	35（35.0%）	19（19.0%）	100（100.0%）
SSなし（女性）	26（32.9%）	8（10.1%）	13（16.5%）	26（32.9%）	6（7.6%）	79（100.0%）
合計	50（27.9%）	14（7.8%）	29（16.2%）	61（34.1%）	25（14.0%）	179（100.0%）

表22　「ソーシャルサポートなし」グループの性別と家計の状況の関係

	余裕あり	余裕はないが困ることはない	余裕なし	合計
SSなし（男性）	4（3.6%）	35（31.8%）	71（64.5%）	110（100.0%）
SSなし（女性）	1（1.3%）	36（45.0%）	43（53.8%）	80（100.0%）
合計	5（2.6%）	71（37.4%）	114（60.0%）	190（100.0%）

表24「ソーシャルサポートなし」グループの福祉サービス利用状況（複数回答）

	N	%	ケースの%
食事サービス	9	4.3	4.5
緊急通報サービス	3	1.4	1.5
火災安全システム	5	2.4	2.5
電話訪問	8	3.8	4.0
住宅改修	1	.5	.5
日常生活用具の給付	4	1.9	2.0
家具転倒防止・ガラス飛散防止	6	2.9	3.0
どれも利用していない	172	82.7	86.0
合計	208	100.0	104.0

次に「ソーシャルサポートなし」グループの福祉サービスの利用意向についてみてみると、割合が高いのは、表25にみるように「緊急通報サービス」（32.2%）、「食事サービス」（29.4%）である。他方「どれも利用したいと思わない」（27.8%）も同程度の割合で存在する。性別別（表26）に福祉サービスの利用意向をみると、女性は「緊急通報サービス」（35.8%）、「家具転等防止・ガラス飛散防止」（29.9%）と生活上の「安心」に関するサービスの利用意向が男性と比べると高い割合を示しているのに対して、男性は「どれも利用したいと思わない」（38.1%）の割合が高い。

表25「ソーシャルサポートなし」グループの福祉サービス利用意向（複数回答）

	N	%	ケースの%
食事サービス	53	17.1	29.4
緊急通報サービス	58	18.7	32.2
火災安全システム	28	9.0	15.6
友愛訪問	14	4.5	7.8
電話訪問	31	10.0	17.2
住宅改修	17	5.5	9.4
日常生活用具の給付	25	8.1	13.9
家具転倒防止・ガラス飛散防止	34	11.0	18.9
どれも利用したいと思わない	50	16.1	27.8
合計	310	100.0	172.2

表26「ソーシャルサポートなし」グループの性別別福祉サービス利用意向

	食事サービス	緊急通報サービス	火災安全システム	友愛訪問	電話訪問	住宅改修	日常生活用具の給付	家具転倒防止ガラス飛散防止	どれも利用したいと思わない	合計
SSなし（男性）	30(30.9%)	28(28.9%)	13(13.4%)	11(11.3%)	19(19.6%)	8(8.2%)	12(12.4%)	9(9.3%)	37(38.1%)	97
SSなし（女性）	19(28.4%)	24(35.8)	14(20.9%)	2(3.0%)	9(13.4%)	8(11.9%)	12(17.9%)	20(29.9%)	10(14.9%)	67
合計	49	52	27	13	28	16	24	29	47	164

Ⅳ．考察

先行研究では、「男性」、「未婚」、「子どもがいない」、「低所得」という属性をもつ人々が「社会的孤立」という問題を抱えやすいと報告されている。また、高齢者のうち女性は高齢のほうに孤立者が多いのに対して、男性は年齢の低いほうに孤立者が多いことも明らかになっている（斉藤ら2009）。この研究は社会的ネットワークの様態から「社会的孤立」を把握しているため、単純な比較はできないが、本研究でもこうした属性をもつ人々が「ソーシャルサポートなし」グループに該当していた。冒頭でも述べたように、「社会的孤立」は「ソーシャルサポートネットワークの切断」とも基本的には同義であるから、本研究結果は先行研究の結果を支持するものといえる。これらのグループは支援の必要性が高いグループであり、現在墨田区で取り組んでいる「高齢者みまもりネットワーク」において、特に注視していくことが必要である。

さて、このグループのほとんどは現在福祉サービスを利用していなかったが、「食事サービス」といった日常生活の支援に関するサービスや、「緊急通報」など「安心」に関わるサービスについては、それなりの利用意向があるといえそうである。先行研究では、支援する側、される側双方の心理的な負担が少ないため、各種在宅サービスの中でも配食サービスが最も受け入れられやすいと報告されている（根本ら1998）。「ソーシャルサポートなし」グループに対しては、こうした心理的抵抗が少ないサービスの導入を検討し、それをきっかけとしてその後の支援につなげていけるような取り組みが必要であろう。もっとも男性は女性に比べて「どれも利用したいと思わない」と回答している割合が高いことからもわかるように、「孤立者」の中でもさらにその属性によってアプローチの方法を変えていくことも検討されなければならないだろう。具体的な支援の方法については、墨田区が始めた取り組みの経過を見ながら稿を改めて検討したい。

1）斉藤は、「社会的孤立」の指標に関する先行研究のレビューを行い、それらを①指標の構成（項目数と項目の内訳）、②項目を加算、得点化するか否か、③どの水準からを孤立とするのか基準（カットオフポイント）を設定しているか否か、という3点からまとめている（斉藤2009）。

2）「近所の人」、「町会・自治会の人」を「近隣の人」に、「地域包括支援センターの職員」、「ケアマネジャー」、「サービス事業所の職員」、「民生委員」、「行政の職員」を「公的サービス機関の人」に、「かかりつけ医」、「病院」を「医療機関の人」にそれぞれまとめた。なお調査票では「職場の人」と「NPOやボランティアの人」という選択肢があったが、少数なので分析から除外した。

3）要介護3以上は該当者がいなかった。

【文献】

House JS (2001) Social isolation kills, but how and why? *Psychosomatic Medicine* 63(2), 267.

岩田正美・黒岩亮子（2004）「高齢者の『孤立』と『介護予防』事業」『都市問題研究』56（9），21-32.

後藤広史（2009）「社会福祉援助課題としての『社会的孤立』」『福祉社会開発研究2』7-18.

河合克義（2009）『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』法律文化社.

根本博司・成田すみれ・堺　園子他(1998)「社会的孤立状態にある要介護独居高齢者へのソーシャルワーク実践に関する研究－在宅介護支援センターにおけるアウトリーチ実践の訪問聞き取り調査から」『安田生命社会事業団研究助成論文集』34,152－61.

斉藤雅茂（2009）「社会福祉調査としての高齢者孤立研究の意義と課題」『日本福祉大学社会福祉論集』121，29-42.

斉藤雅茂・冷水　豊・山口麻衣・ほか(2009)「大都市高齢者の社会的孤立の発現率と基本的特徴」『社会福祉学』50（1），110-21.

浦　博光（1992）『支えあう人と人―ソーシャルサポートの社会心理学』サイエンス社.